

ほんのしるべ

書標

2016.
10月号

2016年10月5日発行（毎月1回5日発行）
通巻455号 昭和61年7月15日第三種郵便物認可





ノルウエー オスロ アーク書店

ノセ事務所

能勢 仁



ノルウエーの首都オスロには大型書店が三店ある。ターナム(総合、紹介済み)、アーク(文芸、藝術)、ノルリ(学術書)で、それぞれが特色を持っている。ここではアーク書店を紹介したい。オスロ中央駅前から一直線に宮殿まで一・三キロメートル伸びるカールヨハン通りにアーク書店はある。途中にはターナム書店もある。通りの途中を右折すればオスロ大学があり、その前にノルリ書店がある。つまりオスロの中心街には書店が集中しているのである。

アーク書店は創業一九七八年である。チエーン店を八店もち、カールヨハン店が本店である。場所的には銀座四丁目角、服部時計店がアークだと思えばよい。一等地に一階、地階で各二百坪の売り場である。地下売場は交差点角から直接入れ

るので、地階の意識なしに売り場に入ってしまう。これは店内売り場が銀座通りから見えるマジックのせいであろう。

アークはFGRRショッピングセンターの一角を占めている店舗形態である。パルク風のSCなので若者、女性に人気が高い。アークの店内もブティック店のお洒落である。店内の調度品がよい。レストスペースに置かれた革製の白いソファには高級感があふれていた。周辺の白を基調にした書棚には美術書、写真集、新刊がバラバラと陳列されていて、ブティック風書店といってもよい。これが北欧だと強く感じた。

地上階は新刊、ベストセラー、文芸書、料理書、子どもの本、玩具、文具である。地下売場はDVD、美術書、SFポケットブック、英書、ペーパーブック、雑誌である。

全山が紅葉しているのではなく、常緑樹や

茶色の葉や、銀杏に似た金色の葉に混じって、

真紅の繁みが断続的にコントラの画風に流れ

去って行くのでした。それゆえに、朱い葉は

いっそう燃えたっているように思えました。

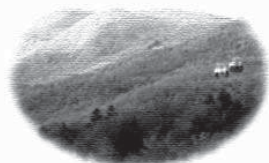
何万種もの無尽の色彩の隙間から、ふわり

ふわりと大きな炎が噴きあがっているような

思いに包まれて、私は声もなく、ただ黙って

鬱蒼とした樹木の配色に見入っておりました。

『錦繡』宮本輝著（新潮文庫）より



もくじ

世界の本屋さん 58

「書標」歳時記〈10月〉

著書を読む(534) 「本屋がなくなったら、

困るじゃないか」

ブックオカ編

書標・書評 『大切本』ほか

特集 怒りと赦し

よむ くま

今月のおすすめ

コンピュータ	15	自然科学	16
医学書	17	社会科学	18
人文科学	20	文学・文芸	21
文庫・新書	22	芸術	23
実用書	24	地図・旅行書	24
語学・辞典	25	児童書	26
読者から	27		
インフォメーション	30		
本屋うらばなし「書店と映画館」			

※表示価格はすべて本体価格です。

『本屋がなくなったら、困るじゃないか』ブックオカ編

ブックオカという本のイベントを、福岡で続けています。けやき通りの軒先を借りた古本市や、福岡の書店が行う激オシ文庫フェア、本に纏わる人にお話を聞き、語り合う書店員ナイトなど。それぞれが持ち寄ったイベントで成り立つ、お花見のような本のお祭りです。

十年目になる二〇一五年を区切りに一旦お休みしようということになり、今までできなかったイベントとして打たれたのが「車座トーク」。本と本屋の未来のために何が必要か、出版社・取次・書店が膝を詰めて話し合い、一歩踏み出そうという庄の強いイベントで、皆さん関門海峡を超えた所為か「旅の恥はかき捨て」という風。忌憚なく、盛り上がりました。

かき捨てと言いながら、本にしちゃうのが抜けないところで、長い長い十時間を超える話を分かりやすく、興味深く、面白くまとめくれた編集者たちに脱帽でした。本屋について書かれた本は沢山ありますが、この本には流通を担う大手取次の方々が登場するのが、特筆すべきところ。勇気を出して組上りやってきた彼らが抱える、長年本を流通する中で培ってきた使命感と、現状を変えようとする異端児たちの危機感がひしひしと伝わってきます。

荻窪で話題の書店「三」を営む辻山さんが、開業前に参加して



いただいたのもこの本の見どころのひとつ。大胆にも損益計算書モデルを公開し、それを書店経営の先輩である大阪のスタンダードブックストアの中川さんや福岡のブックスキューブリックの大井さん（ふたりは同い年）が思案しアドバイスを加えるという頁があります。開業にかかる初期費用をここまでつぶさに書いた本やサイトは、近年見えていませんし、本に関係する職業に就いている人でも知らなかった事実がたくさん語られます。

広島でウイー東城店を営む佐藤さんも、無理矢理連れ込まれ飛び入り参加。人口減少が著しい地方都市で、本を買う人の心情を読む佐藤さんは、いつもあつけらかなとした可愛らしい人なのですが、仕事ぶりはすごい。年賀状プリントに、印鑑作り、エステに本を読むママのための子守りに……町全体の孝行息子のような人がいるのだと、隣の席でひれ伏して聞いておりました。

出版社として参加したのは、この本を作った西日本新聞社出版部の末崎さんと忘羊社の藤村さん、そして弦書房の野村さん。それぞれにヒット作も刊行し、情熱をもって絶えず本を作り続けている人達ですが、東京を中心とした物流への積年の疑問がありました。能力があれば日本じゅうどこにいても本が作れるのに、流通はなぜスムーズにいかないのか。物流と決済を切り離した方がいいのかなど。ここでは現状と反省点、本を作って

売るといふことの本質について、熱い議論が交わされ、これからのポイントとして、情報の出し方や集め方、さばき方などが話題となりました。本ができればる前に、本の情報や装幀などを出版社と書店、作り手と売り手が知ることによって、イベントの企画や、時機に合った仕入れができる、値付けや販促はそういういった情報をもとに行われるべきではないか。議論の中から数多くの提案や今後の仕事への多くのヒントが生まれています。

個性が溢れてちよつとはみ出しがちな面々を、座談会として形作つてくださったのは、文化通信の編集長・星野さんとトランスビューの工藤さん。トランスビューは出版事業と小出版社の流通事業を担う会社で、何より、商品調達が迅速。書店の負担を少なくして利益を出そうという流通形態を作っています。星野さんは国内のみならず海外の書店事情などにも通じていて、話題が袋小路に入ると、お二人が「こういう見方もありますよ」とりなす場面が幾度もありました。

車座の中で生まれた疑問を解決するべく、第三部では、末崎さん（『ペコロスの母に会いに行く』などを編集。）藤村さん（『ボクシングと大東亜』乗松優著など。いい本を沢山作っています）、大井さん（ブックオカの実行委員長を務める）が、新たな流通に取り組む人達にインタビューをしています。

車座トークにもご参加いただいたトランスビューの工藤さんには、実際の倉庫の状況や取引先破産前後の動きや今後の展望を。文化通信の星野さんには、ドイツで実際に起きている業界の壁を超えた改革について、さらに語っていただきました。

直取引で活躍する新しい取次ツバメ出版流通の川人さんや、H.A.Bookstoreの松井さん、ヒット作を次々と生み出す直取引

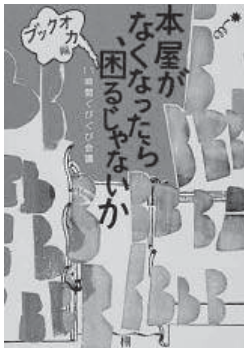
の出版社ミシマ社の三島さんからは現在の流通に至った経緯と舵の切り方についてお話いただいています。

第四部は九州の若手書店主の話。地域と書店の在り方として、「仕入れ」を中心とした日頃お客様から見えない部分を熊本長崎書店の長崎さんや大分のカモシカ書店の岩尾さんのインタビュー・寄稿が掲載されています。

美しい話にしようものなら、叩きのめされそうな丁々発止。それでも笑いに溢れているのは、そこにいる誰もが当事者であり、噂話に興じる人がいなかったから。気持ちの良い「座」をお読みいただけたら嬉しいです。

今年はお休みするはずのブックオカですが、いくつかのイベントは十一月に開催することにしました。毎年お手伝いしてくださっている若いボランティアスタッフの皆さんが「今年もしましょう」と動き出しているのです。書店員としてじっと見ていること……なんてできませんよね。本は人を動かすものだと思ったら、店を開ける緊張感が変わります。

（ブックオカ実行委員・丸善博多店／徳永圭子）



『本屋がなくなったら、困るじゃないか 11時間ぐびぐび会議』
西日本新聞社・1,800円



『メ切本』

左右社編集部編

左右社・二三〇〇円

誰しもが人生の中で追われることがあったであろう、恐るべき怪物であり、親しい友人のような存在が「メ切」だ。メ切におびえつつも、メ切があることで人は目標に向かって邁進できる。

作家は、周囲の冷たい視線に耐えて机に向かい、時には言い訳をしてメ切を延ばし続けながらも、どうにか原稿を書き上げた。明治から現在に至る九十人の書き手たちによるメ切エピソードが詰まった一冊が、この『メ切本』である。夏目漱石や谷崎潤一郎といった文豪から、漫画家の長谷川町子、手塚治虫、今活躍する小川洋子や村上春樹など錚々たる面々が揃い踏みだ。

もちろんメ切をしつかり守る作家もいるのだが、それを理想としつつもなかなか達成できない人も多い。これを読むあなたはどちらの立場に共感するだろうか。これまで繰り返し返されてきたメ切との闘いの日々を、今メ切に追われている方にも、辛いメ切の記憶を持つ方にもぜひ一読していただ

きたい。

内容も素晴らしいが、装丁も優れている。表紙や表紙をめくったトビラには、本文中に綴られている、メ切に苦しむ作家たちの印象的な言葉の数々が印刷されている。とりわけ、表紙の「どうしても書けぬ。あやまりに文芸春秋社へ行く。」という言葉が秀逸である。抜粋された言葉が誰のものであるのか、文中から探していくのも面白いだろう。

さて、この原稿もまたメ切に追われつつ書き上げたものである。次回は余裕をもってメ切に臨みたいものだが、このメ切を楽しんでいる自分もいるのではないかと思うのであった。説得力はないが、周囲のためにもメ切は守るべきであろう。(齊)

『叫びの都市』

寄せ場、釜ヶ崎、流動的下層労働者』

原口 剛著

洛北出版 二四〇〇円

高度経済成長の只中、大阪湾には貨物が殺到した。それを運ぶのは、日々「釜ヶ崎」から移動してくる日雇労働者たちだ。彼らの労働力は、海運・港湾資本にとって、費用の抑制と貨物の波動性への対応に、不可欠のものであった。

そうでありながら、資本は自らの利益の

ために、労賃を買い叩く。仕事の過酷さは、そして仕事のあるなしもまた、入港する船の混み具合次第である。「釜ヶ崎」は、日本資本主義発達の歪が寄せられた場所である。歪は隠されなければならない。コンテナ化が「ドヤ街」の労働力を不要とし、続く構造不況で、大資本と行政は、彼らを容赦なく切り捨てる。更に、地域の連続線を分断し、過去の痕跡をも消してしまう。「築港」は「天保山」と名付けられて遊興空間へと変貌し、「釜ヶ崎」はついで地名として採り用されなかった。

大阪万博、関西国際空港、東京オリンピックと、かつての港湾労働者は建設労働者として資本に都合よく利用され続ける。仕事を求めて移動する労働者たちと共に、運動は全国に飛び火し、拡がっていった。歪はますます深まり、蓄積されたエネルギーは臨界点を超え、遂に「暴動」として発現する。地名となれなかった「釜ヶ崎」は、運動の名であり続けた。

フリーターと呼ばれる日雇労働者たちがネットカフェの壁に分断され、登録された電話番号のみで調達される今日、原口剛は「釜ヶ崎」の歴史を発掘し、記録していくことにより、そのエネルギーを再び呼び戻そうとするのだ。(つ)

『配色の設計』

色の知覚と相互作用』

ジョセフ・アルバース著

ビー・エヌ・エヌ新社・二四〇〇円

色彩豊かな数多ある色に関する書の中でも、一際目を引く美しい本だ。初版は一九六三年に書かれ五十年以上読み継がれ、色彩の本として、あるいは現代美術において今や古典となっている作品である。今回手にしているのは発行五十周年記念版の日本語翻訳である。

著者のジョセフ・アルバースはアーティストであり、教育者であった。パウハウスのメンパーであり、後にアメリカへ渡り、ブラック・マウンテン・カレッジ、イエール大学で教鞭をとった。本書は彼の色彩研究と色彩教育の記録である。前半にテキスト、後半にそれに対応する図版が収録されており、主にカラーペーパーを用いた実験を確認しながら学べるようになっていて、(必要に応じて)図版を切り取って使うのが良い。

「理論とは実践から生み出された結論である」と述べているように、色の光、波長の物理学的性質や色彩体系ではなく、一貫して色と色の相互作用と、それを見る眼を養うことに関心が払われている。視覚的に

おいて物質の実際の色をそのまま認識されることはほとんど無い。色は美術において最も相対的なものだ。色は常に人を騙し、私たちの知覚上で絶えず相互作用を繰り返している。印象派の画家は緑を描くのに黄色と青を混ぜた緑を使わず、黄色と青の小さな点を打ち、知覚上で混ざり合うようにした。

今日、色彩構成の場合はコンピュータへ転換されたが、本質的な色の相互作用への認識と繊細な感受性を学ぶために、尚読み継がれるべき書である。(一)

『死すべき定め』

死にゆく人へ何ができるか』

アトウール・ガワンデ著

みすず書房・二八〇〇円

誰もが、人が死すべき定めの下に生まれたことを知っている。しかし、大切な人が死に面した時、あるいは、人生で一度きりの自身の死を前にした時、そのこと理解して受け入れられる人がどれだけいるだろうか。外科医である著者が本書で触れた幾人かの人生とその死の場面は、どれも深く心に刺さる。

例えば高齢者福祉施設での人のあり方。医学の進歩により多くの人々が老衰で死

を迎える現代では、衰えていく身体機能を、決定的な崩壊＝死が訪れるまで介護者が支える。

「人は自分には自律を求めるのに、大切な人には安全をもとめる」。起床から就寝までの行動をコントロールされ、注視される生活を想像してみたい。本文に登場するある高齢の女性は、まるで監獄に入られているみたい、と話した。また別の女性は、「人生で一番いいことは自分でおトイレに行けるときのなよ」と。これが人生の終着点なのだ。入居者の望みは叶えられないことも多い。しかし医療的には間違っていない。転倒の危険は？ 誤嚥の危険は？ 介護者から見れば当然の行爲も、視点を変えれば大きな矛盾を孕む。

本書ではアメリカの終末期の医療・介護の現場の現在の姿が、その矛盾が浮き彫りにされている。同時に、死に向かうその人が最期の瞬間まで自律した自己を保てるよう、旧来の制度・文化と戦い、前に進む医療者・介護者たちの姿が克明に描き出されている。「正解」はない。だが、患者と共に苦悩し、患者にとつての最善を模索する著者の姿は、読者に一筋の光をもたらさるう。(山)

怒りと赦し

「愛書家の楽園」今月のテーマは「怒りと赦し」です。

ハンナ・アレントは『人間の条件』（志水速雄訳、ちくま学芸文庫・一五〇〇円）の「不可逆性と許しの力」と題された節の中でこう言っています。「人間は、自分の罰することのできないものは許すことができず、明らかに許すことができないものは罰することができない」。この言葉は、ナチによる巨大な戦争犯罪、すなわちホロコーストを念頭に置いたものです。ダウンタウンの松本人志は、ワイドショーで連日報じられる芸能人の不倫を決して許そうとしない人びとを指してこう言いました。「怒ってもない人に許してもらうなんて不可能」。ホロコーストの時代から、テロリズムとウェブ炎上の現代まで、人は「怒り」とどのように向き合い、「赦し」を手にしてきたのか。二十四冊の本とともに、考えていきたいと思えます。

ホロコーストと赦し

ジャック・デリダ著／守中高明訳『赦すこと 赦し得ぬものと時効にかかり得ぬもの』（未來社・一八〇〇円）は、デ

リダ晩年の問題系のひとつ（「赦し」の可能性＝不可能性のアポリアを緻密に展開。現代世界のユダヤ教・キリスト教・イスラーム教をめぐる錯綜する紛争やイデオロギー争いのなかで、赦し得ない罪をそれでも赦し得るのかという究極の問題を思考します。ヘーゲルやアレントにも言及される訳者解説とともに、上述の『人間の条件』の理解の補助線としても有効な一冊です。



『憎むのでもなく、許すのでもなく』

ホロコーストに関連する本をもうひとつ。ボリス・シリウルニク著／林昌宏訳『憎むのでもなく、許すのでもなく ユダヤ人一斉検挙の夜』（吉田書店・二三〇〇円）は、一九四四年一月、ユダヤ人一斉検挙のために捕らえられ、収容所に送られる直前に脱出した、当時六歳の著者による回想。四十年間語ることができなかった自

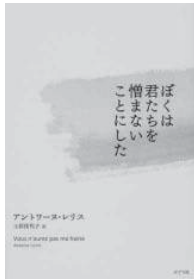
らの壮絶な物語を静かに紡ぎ出し、精神科医の立場でトラウマをとまなう記憶から逃れる方法も多角的に分析しています。

セネカ著／兼利琢也訳『怒りについて 他二篇』（岩波文庫・一〇二〇円）は、暴君ネロの幼時の家庭教師であり、のちに政治的ブレインとなった哲学者／文学者による、怒りという破壊的な情念の分析。彼は怒りを「不正に対して復讐することへの欲望」であり、「弱さの証明」だと言います。そして怒りから身を引き離し、内省すべきと説くのです。千九百年近い時の隔たりがありますが、シリユルニクの視点とも近いもののように思えます。

テロリズム、 憎しみの連鎖を超えて

近年の、イスラム教原理主義によるテロルに関連した書物をいくつか。エマニユエル・トッド著／堀茂樹訳『シャルリとは誰か？ 人種差別と没落する西欧』（文春新書・九二〇円）は、二〇一五年一月のシャルリ・エブド襲撃事件を受けて表現の自由を掲げフランス各地で行なわれた「私はシャルリ」デモが、自

己欺瞞的で無自覚に排外主義的であったことを指摘します。宗教の衰退と高まる排外主義が欧州を内側から破壊しつつあることに警鐘を鳴らしています。ヴォルテール著／斉藤悦則訳『寛容論』（光文社古典新訳文庫・一〇六〇円）では、十八世紀フランスの思想家が、カトリックとプロテスタントの対立下、狂信と差別意識の絡んだ冤罪事件で処刑された男のために立ち上がります。理性への信頼から寛容の意義、美德を説いたこの歴史的名著が、シャルリ・エブド襲撃事件後のフランスで再評価されたことは、忘れてはなりません。



『ぼくは君たちを憎まないことにした』

二〇一五年十一月のパリ同時多発テロ事件で妻を喪ったひとりの男性は、SNSでテロリストに「憎しみを与えない」と宣言しました。暴力と混乱のなかに灯

された言葉、人間の尊厳——。最愛の妻を奪われた夫が、小さな息子と共に生きる希望を綴じ込んだ、稀有なドキュメント。それが、アントワニス・レリス著／土居佳代子訳『ぼくは君たちを憎まないことにした』（ポプラ社・二二〇〇円）です。ザック・エブラヒム他著／佐久間裕美子訳『テロリストの息子』（朝日出版社・二二〇〇円）は、ジハードを唱えて殺人を犯し、さらに投獄中に世界貿易センターの爆破に手を染めた父を持つ男性の物語。迫害と差別と分裂の危機が家族を襲うものの、狂気と憎悪の連鎖を、彼は選びませんでした。共感と平和と非暴力を選択したこの実話も、レリスの宣言に通じるものがあります。



『テロリストの息子』

世界中で試みられる「救し」
ドナルド・B・クレイビル他著／青木

玲訳『アーミッシュの赦し なぜ彼らはすぐに犯人とその家族を赦したのか』(重紀書房・二五〇〇円)。二〇〇六年十月、平穏な村の学校で惨劇が起こりました。銃の乱射で少女五人が死に、五人が重傷を負ったのです。ところが事件後すぐに、アーミッシュは犯人とその家族を赦すという声明を出し、世界に衝撃を与えました。称賛と同時にさまざまな論議を呼んだ事件の全貌が描かれます。



『それでも、私は憎まない』

イゼルデイン・アプエライシ著／高月園子訳『それでも、私は憎まない あるガザの医師が払った平和への代償』(重紀書房・一九〇〇円)。二〇〇九年一月、イスラエル軍のガザ襲撃中の爆撃により三人の娘を喪った医師は言いました。「わたしの娘たちが最後の犠牲者になりますように」。報復を求めもしなければ、憎

しみに駆られることもなかった医師は、対話を始め、行動を起こすよう人びとに訴えました。

マーサ・ミノウ著／荒木教夫、駒村圭吾訳『復讐と赦しのあいだ ジェノサイドと大規模暴力の後で歴史と向き合う』(信山社出版・三二〇〇円)。弱者が発する憎悪、弱者に向けられた憎悪にいかに対処し、共生社会を築くかという問題・関心から、戦争犯罪やジェノサイドなどの大規模暴力について考察。国際法・憲法や政治的分野から、哲学・心理学・歴史学までを縦横無尽に取り込み、著者の真骨頂を示した研究書です。

ジョセフ・セバレンジ他著／米川正子訳『ルワンダ・ジェノサイド生存者の証言 憎しみから赦しと和解へ』(立教大学出版会・四〇〇〇円)。八十万人が犠牲になった惨劇を経験して、父母兄弟を失い、亡命を余儀なくされた当事者が語る、ジェノサイドとルワンダの真実。想像を絶する苦難と魂の遍歴のなからつかんだ、社会の根底の憎しみを平和へ転換する道——「赦し」と「和解」の必要性を説いています。

日本とアジアの関係の中で

金時鐘著『朝鮮と日本に生きる 濟州島から猪飼野へ』(岩波新書・八六〇円)は、日本統治下の濟州島で育ち、一九四五年の解放を機に朝鮮人として目覚め、独立運動に飛びこんだ著者の自伝的回想。韓国政府軍や警察などが島民の五人に一人にあたる六万人を虐殺した凄絶な四・三事件と、島からの命がけの脱出、来日後の猪飼野での生活を語ります。虐殺と、亡命と、その後の生。上記、セバレンジ他の著作を想起せずにはいられません。

加藤直樹著『九月、東京の路上で 1923年関東大震災ジェノサイドの残響』(ころから・一八〇〇円)。関東大震災の直後に響き渡る叫び声。ふたたびのオリピックを前に、繰り返されるヘイトスピーチ。一九二三年九月、ジェノサイドの街・東京を描き、現代に残響する忌まわしい声にあらがう——路上から生まれた歴史ノンフィクションです。東史郎さんの南京裁判を支える会著『加害と赦し 南京大虐殺と東史郎裁判』(現代書館・二六〇〇円)。加害兵士の証言と日記の出版、それに対する口封じとしての裁判という一連の流れが、国際社会の中の日本

にとつてどういう意味をもつのか、加害者と被害者の間で「赦し」は成り立つのか、この裁判の一番の被害者は誰であるのか、などを多面的に論じる一冊です。

現代日本の対話と不寛容

川名壮志著『謝るなら、いつでもおいで』（集英社・一五〇〇円）友だちを殺めたのは、十一歳の少女。被害者の父親は、新聞社の支局長。僕は、駆け出し記者だった——。世間を震撼させた「佐世保小六同級生殺害事件」から十年。被害者家族は、どう精神のバランスをとり生きてきたのか。新聞には書けなかった実話。書名が印象的です。



『謝るなら、いつでもおいで』

さかばらあつし、上祐史浩著『地下鉄サリン事件20年 被害者の僕が話を聞きます』（dZERO・一五〇〇円）。サリ

ンがまかれた車両に乗り、今も後遺症と闘う被害者と元オウム幹部の対話。なぜ麻原やオウムが生まれ、凶悪犯罪集団と化したのか。なぜ今も入信する若者がいるのか。被害者さかばら氏が、元オウム幹部上祐氏に歯に衣着せぬ質問をぶつけた六時間の記録。理解と赦しへの道は、対話から開けることもあるでしょう。森達也著『自分の子どもが殺されても同じことが言えるのか』と叫ぶ人に訊きたい』（ダイヤモンド社・一六〇〇円）。当事者でもないのになぜこれほど居丈高になれるのか。不安や恐怖、憎悪を共有しながら、この国は集団化を加速していく。取り返しのつかない事態を避けるため、いま何ができるのか。オウム真理教や佐村河内守に目を向けてきたドキュメンタリー作家の言葉には、耳を傾ける価値があります。



『自分の子どもが殺されても同じことが言えるのか』と叫ぶ人に訊きたい』

田中辰雄、山口真一著『ネット炎上の研究』勁草書房（二二〇〇円）。インターネットの普及で多くの人が自由な議論に加わり、討論の民主主義が広がると期待された。しかし論調は暗転し、悲観的な意見が増えていく。大きな原因になったのが、いわゆる、炎上、問題である。炎上について分析を行なうとともに、その対策を示す研究書です。

私たちの〈心〉

ギユスターヴ・ル・ボン著／櫻井成夫訳『群衆心理』（講談社学術文庫・一〇二〇円）。『群衆』が歴史を動かす時代となった十九世紀末、フランスの社会心理学者が心理学の視点で群衆の心の解明を試み、その特徴と功罪を鋭く分析して、未熟な精神に伴う群衆の非合理的な行動に警告を発した。今日の社会心理学の研究発展への道を開いた古典的名著。上述の本にもある、炎上、問題を考えるための一助にもなるでしょう。

宮地尚子著『傷を愛せるか』（大月書店・二〇〇〇円）。傷を愛することはむずかしい。傷は醜い。傷はみじめである。ただ、傷をなかつたことには、しないでい

たい。トラウマ、ジェンダー、セクシュアリティをテーマに研究する一方、DVや性暴力被害者へのカウンセリングにも取り組んできた著者が、旅先で、臨床現場で、傷ついた人たちの心に触れながら綴った、温かいエッセイ二十三篇が収録されています。



『傷を愛せるか』

そして最後に、「怒り」を「赦し」に変えていくための、実践的な技術について書かれた本をいくつかご紹介します。

ティク・ナット・ハン著／岡田直子訳『怒り 心の炎の静め方』（サンガ・一二三八円）は、家族や友人関係における怒りだけでなく、市民や政府間における怒りについても取り上げ、本書を陶酔的な自己啓発本とは一線を画すものになっています。読者が怒りを克服し、「ピーニング・ピース（平安）」の地へと向かうための

智慧と平静心を与えてくれるでしょう。ウ・ジョーテイカ著／魚川祐司訳『ゆるす 読むだけで心が晴れる仏教法話』（新潮社・一三〇〇円）は、「どうして私は私を充分に愛してくれなかったのか」と、幼いころから怒りを抱え続け、周りの人びとにいらだち、冷淡に振る舞って生きてきた著者が、長い苦しみの末、怒りを捨て去ることに成功したとき、心と身体に起きた素晴らしい奇跡について記されています。人気僧侶による名講演です。



『ゆるす』

菅野昭子著『アンガーマネジメント 怒りやすい子の育て方』（かんき出版・一六〇〇円）は、子どもが「自ら怒りを理解し、コントロールする」ための手法がわかる一冊。大人にもくすぶっている「怒り」への気づきと対処法を子どもと

一緒に学ぶ教育プログラムと実例集。保育士や幼稚園・小学校の教諭はもとより、子どもの怒りについてより理解を深めた親にもおすすめです。

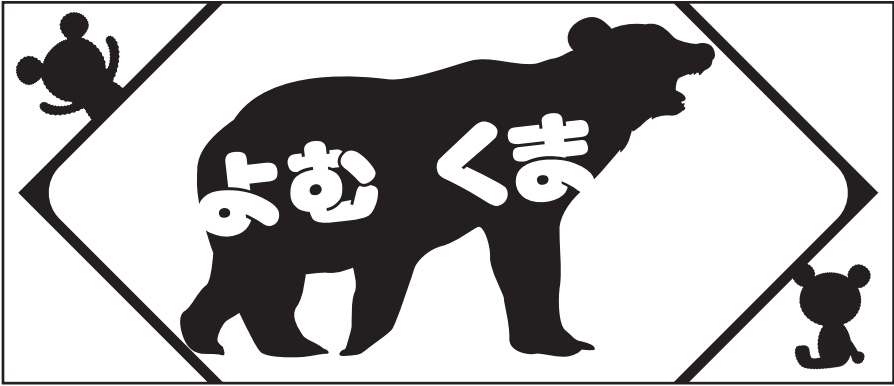


『アンガーマネジメント 怒りやすい子の育て方』

歴史的／国家的規模での「怒りと赦し」を取り上げた書籍から、個人的な事例とその対処法を記したものでさまざまにご紹介しました。関心をお持ちの本を、手に取っていただければ幸いです。

（作品社・青木誠也）

*愛書家の楽園・特集「怒りと赦し」でご紹介した書籍は、ジュンク堂書店池袋本店一階エレベータ前と福岡店三階、丸善名古屋本店一階と京都本店地下二階にて、十月十日～十一月九日までフェア展開中です。



今年も山菜やタケノコ採りに行った人が山で熊に襲われる事件が相次ぎました。野生の熊に出会ってしまう非常事態が、人生の中でそうそう起こると思いたくありませんが、実際にキャンプやハイキングで熊に遭遇した人々にとっても、想定外の事であったのではないのでしょうか。山間部に住んでいたり、必要があつてしょっちゅう山に入るといった人であれば、きつと頭のデスクトップには（対熊フォルダー）なるものが常駐していることでしょう。けれど家や職場、学校が街中で終始する暮らしをしていれば、出し抜けの熊との出会いに、わらをも掴む思いでひっぱり出すデータは（いつか……どこかで……聞いた事がある……：ような……気が……する？）程度の心もとないおぼろげなもの。それだって、初めて出会う本物の熊の緊迫した息づかいを聞けば、一瞬でデリートされてしまいう。その恐怖に私なら間違ひなく、場違いなパニック症状が起きそうです。

『熊ノに出会つた襲われた その時クマとヒトはどうしたか？ 超リアルな実録体験談』（つり人社・一一一円）はま

さにその瞬間ノをなんとかしのぎ切り、生還した人々のエピソードが紹介されています。本州には広範囲にわたつてツキノワグマが生息しています。本書に登場するだいたいの方は（出会つた恐かつた）で済んでいます（出会つた襲われた）体験談は、生々しい情景描写に鳥肌が立ちます。あ、熊……と思つた次の瞬間には熊が体の上に乗つていて、顔をかじつていたという方の話が一番ショッキングでした。



『クマにあつたら どうするか』

しかし、ただただ熊を怖れているだけではいけません。熊の事情を知り、熊の言い分にも耳をかたむけてみましょう。

『クマにあつたら どうするか』（ちくま文庫・八四〇円）は野生熊のスペシャリスト・姉崎等さんの本です。子どもの頃には熊と相撲をとつて遊んだという姉崎

さんは、アイヌ民族最後の狩人。北海道の自然と共に生き、素手で得た彼固有の経験と知識、アイヌと熊の切つても切れない深いつながりを教えてくれます。

熊と対峙して、どうしようもなければあきらめる、というのが腹をくくった狩人の然るべき答え。でも、なかなかそうは諦観できません。実用書担当者がすすめてくれたのは、『**山でクマに会う方法**』（ヤマケイ文庫・米田一彦著・八六〇円）。信頼できる確実な（会う方法・会わない方法・会ってしまった時）が巻末にあります。熊を知るため、熊に会うため、熊を守るために、長年熊を追い続ける、日本ツキノワグマ研究所の米田一彦さん。シンプルで読みやすい文章の中に、「熊愛」があふれています。きれいごとでは済まない現代の熊害と向き合い、熊と人間の双方の折り合いを模索し続けます。



『山でクマに会う方法』

人間を襲う熊を題材にした小説はいくつもあります。北海道の開拓村に冬眠時期を逸した熊が現れ、二日間で六人を殺害した大正四年の事件を題材にした吉村昭『**熊嵐**』（新潮文庫・五二〇円）や、厳冬の北海道を舞台に熊と若き森林保護官の壮絶な死闘を描く山岳小説、吉村龍一『**光る牙**』（講談社文庫・五九〇円）などは、あらずしを読んだだけで背筋が凍りそうです。

せめぎ合うのは、もちろん熊と人間だけではありません。

熊同士が遭遇した時、どうなるのか。『**ペア・アタックスⅡ**』クマはなぜ人を襲うか』北海道大学出版会・二四〇〇円）に詳しい調査報告がありました。熊が木から落ちる時の調査も細かく報告されていて、熊の生態に関するありとあらゆる研究結果がとても興味深いです。著者は北米のグリズリーやブラックベアを研究する、熊の動物行動学的研究の第一人者、ヘレロ博士。とにかく熊のすべてを知りたい、一刻も早く熊になりたい、という方の必読書です。日本版の刊行時に、博士は写真家であり探検家でもあった星野道夫さんの死についてまるごと一章分を

書き足しています。星野さんから多くを学んだという博士は、カムチャッカ半島で取材中にヒグマに襲われ、大切な友人を失うことになった一連の成り行きに怒り、（避けることができた死）をくり返し惜しみ、嘆いています。

今年、星野道夫没後二十年にあたり、全国で写真展が開催されるなど、再び注目を集めています。

『**ブルータス No.830**』2016/9/1号（マガジンハウス）でも星野道夫特集が組まれています。この号では、ブルータス編集部のパイト犬（犬です）犬井けん君が、アラスカ取材に行つてアラスカ大学博物館や、デナリ国立公園をレポートしてくれています。鼻がきくの国立公園ではカリブーやムース、熊を発見するたびに興奮してワン／ワン／と報告し、「動物を驚かせないように」と運転手さんに叱られてしまっています。岩合光昭さん、池澤直樹さん、養老孟司さんなどによる（星野道夫を語る）特集記事も充実しています。雑誌ですので、どうぞお早めに。ブルータスは月二回刊行の雑誌で、店舗によってはバックナンバーも在庫を置いてあります。

平凡社ライブラリーからも幻の名著の新装版『グリズリー アラスカの王者』（平凡社ライブラリー・星野道夫著・一五〇〇円）が出版されました。六年もの日日を費やしてできたこの写真集をみると、こんな写真を撮った瞬間の星野さんはもう大自然の一部になっていたに違いない／＼と思います。また、星野さんの作品は写真だけでなく文章もゆつたりと優しい筆致が魅力的ですので、初めて読む方には『旅をする木』（文春文庫・四八〇円）もお薦めです。



『グリズリー』

熊の写真集で『となりのツキノワグマ』（新樹社・二二〇〇円）という一風変わったものもあります。「自然界の報道写真家」という肩書で活動されている宮崎学さんのこの写真集には、今まで誰も見たことのない熊の姿が収められています。

熊の生態を調べつくした宮崎さんが仕掛けた罠（自動撮影カメラ）にかかった熊の姿は、熊社会の今をリアルに映し出しています。

北極で生きる動物たちに大きな影響を与えている北極の王者・シロクマ。その影響力は多方面に及びますが、なかでもそれをよく表している例が、ズキンアザラシの授乳期間。哺乳類最短、なんと四日間なのです。体の大きな母親と一緒にいると、子どもがシロクマに発見され狙われやすくなるため、早く別れ別れにならないと危険なのです。たった四日間しか親子と一緒にいられないなんて……。それに比べてシロクマは、子熊たちが母親から自立するまで平均二年から二年半。ずるいぞ、シロクマ！ けれどこの写真集を見て、（ずつと一緒にいれたいのに）としみじみ目を細めてしまいました。『ホッキョクグマの親子』（二見書房・ロージング・アパート写真／文・一五〇〇円）と『モフモフ家族』（東京書籍・松原卓二写真／文・一三〇〇円）。何も心配せずあどけなく寄り添う子熊たちと、お母さん熊の優しい表情が本当にすてきです。やっぱり、ずるいぞ、シロクマ！

そんな可愛い熊は、物語の中でも大活躍。マイケル・ポンド『くまのパディントン』（福音館文庫、全十巻など）シリーズは一九五八年にイギリスで誕生し、世界中で愛され続けている児童文学です。日本では二〇一四年の映画化がきっかけで好きになったという方も多いと思います。原作ではそのパディントンのイギリス紳士らしい振る舞いがより一層ユートラスで魅力的に感じられますので、素敵な挿絵とともにお楽しみください。

熊の登場する児童文学といえば、日本では『くまのプーさん』（岩波少年文庫・A・A・ミルン著・六八〇円）が最も有名といえるでしょう。デイズニーキャラクターとしても人気のプーさん。かわいプーさんは絵本や映像でも楽しめますが、石井桃子さんの訳された原作をまず読んでみてください。物語の優しい雰囲気と美しい日本語がとてよく調和していて翻訳とは思えない読み心地です。また、『ウイニー・ザ・プー』（新潮社・一三〇〇円）は、阿川佐和子さんが七十年ぶりに新しく訳されたものです。阿川さんの訳は斬新で、読みやすい中にも石井さんに対する敬意が感じられ、ぜひ読

み比べて頂きたいと思います。



『ウィニーザプー』

日本のくまさんなら、詩人まどみち
おさんの児童詩『くまさん』（童話屋・
一二五〇円）を一番におすすめます。
私をはじめてこの詩に出会ったのは小
学校の教科書だったと記憶しています。
幼い頃の私はリズムカルで覚えやすい
この詩のくまさんと、神沢利子さんの
『くまのこウーフ』（ポプラ社・一〇〇〇
円）が同じくくまさんのように見え、すっ
かりくまさんの虜になってしまいました。
同じく神沢利子『ぼとんぼとんはな
んのおと』（福音館書店・八〇〇円）は
穴の中で春を待つ熊の親子のおはなし。
好奇心旺盛なこくまに優しく語るお母
さんくまの愛情に、こちらの心もあたた
められます。

多和田葉子『雪の練習生』（新潮文庫・

五二〇円）は一風変わった小説。この物
語には動物と人の境がないけれど、擬人
化という風でもなく、ただ主人公はホッ
キョクグマなのです。ほかの動物では伝
わらない、熊だからすつと読者の心に響
く気がするのは、熊がもつ神秘的な力の
せいでしょうか。

最後に、歴史や民俗学の視点で熊を考
察した書籍をご紹介します。

雑誌『ユリイカ』2013年9月号
（青土社・一二三八円）ではクマの特集
が組まれ、世界でのクマと人との関わり
について、神話・文学など様々な視点か
ら解説されています。ヨーロッパにおけ
るクマに対するイメージの移り変わりにつ
いては『熊の歴史 〈百獣の王〉』にみ
る『西洋精神史』（筑摩書房・ミシエル・
パストウロー著・四七〇〇円）に様々な
エピソードとともに紹介されています。
クマに対する畏怖の念から神格化される
という文化が世界中で生まれているとい
うのは興味深い話です。日本ではアイヌ
民族の思想にも通じるものがあります。
アイヌ民族については『アイヌ学入門』
（講談社現代新書 瀬川拓郎著・八四〇円）

がアイヌ民族の歴史・文化・これからに
ついてあらゆる方面から解説した、タイ
トル通りのおすすすめ入門書です。

山の暮らしを味わい深いイラストと文
章で綴った『熊を殺すと雨が降る』（ち
くま文庫・遠藤ケイ著・九〇〇円）。こ
れはマタギに語り継がれる言い伝えで、
神の祟りへの畏れが感じられます。です
が実際には、熊が雨を予測して食いだめ
をするせいで撃たれやすくなるというこ
ともマタギは知っています。このよ
うな自然を敬い共に生きるという考え方
は、宮沢賢治の『なめとこ山の熊』の熊
撃ち小十郎の暮らしを思い出させます。
自然の恵みや動物の命に対する感謝の気
持ちは、私たちが決して忘れてはならな
いことです。私たちはそれらなしでは生
きてゆけないのですから。本書で「失わ
れゆく山の民俗」にぜひ触れていただき
たいと思います。

史上最強の敵であり、神様でもあり、
ときには可愛いくまちゃんにもなれるク
マにこのフェアを捧げます。

（大阪本店）

今月の
おすすめ

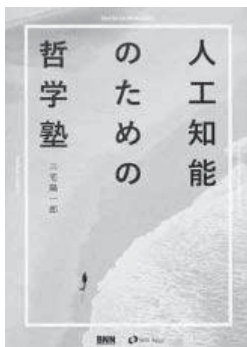
コンピュータ

人工知能のための哲学塾

三宅陽一郎著

同タイトルの連続講義を書籍化したもので、著者はゲームAI開発の第一人者。真に自律的な人工知能を創り上げるためには、科学や工学だけでなく、哲学による足場づくりが重要だという。フッサールの現象学やメルロ・ポンティの身体性の哲学などを紹介しながら、人工知能に内面性や身体感覚といった主観的世界を持たせることができるかについて論じていく。

ビー・エヌ・エヌ新社 二四〇〇円



C++による
プログラミング Elixir

Dave Thomas 著 笹田耕一、鳥井 雪訳

Elixir はプログラミング言語 Erlang の仮想環境上で動作する言語。並行処理に優れた Erlang の特徴を受け継ぎつつ、Ruby のような書きやすさを両立させている。著者はかつて Ruby の魅力に惚れ込み、『プログラミング Ruby1.9 言語編』（オーム社・三八〇〇円）などの著作でその普及に大きく貢献した。本書もまた Elixir が広まる起爆剤となることだろう。

オーム社 二八〇〇円

Unity による

VR アプリケーション開発

作りながら学ぶバーチャルリアリティ入門

Jonathan Linowes 著 高橋憲一、安藤

幸央、江川 崇、あんどやすし訳

手頃なヘッドマウントディスプレイの登場や PlayStation VR の発売など、今年にはバーチャルリアリティ元年と呼ばれる。本書はゲーム開発エンジン Unity をつかって、オリジナルの VR アプリの開発を目指す。VR 酔いなど、特有の問題の解決方法にも言及している。

オライリー・ジャパン 三〇〇〇円

C++ による

プログラミングの原則と実践

Bjarne Stroustrup 著

江添 亮監修 クイープ、遠藤美代子訳

C++ の設計者として名高いストラウstrup 自身の手による解説書、その第二版が邦訳された。著者が本書の原稿を使って教壇に立っていたこともあり、大学初年度のプログラミング授業を想定した難易度。二〇一四年に制定された新規格にも準拠している。

KADOKAWA 七〇〇〇円

オブジェクト指向設計実践ガイド

Ruby でわかる進化しつづける柔軟な

アプリケーションの育て方

Sandi Metz 著 高山泰基訳

たびたび変更を求められるソフトウェア開発。メンテナンス性を上げ運用コストを下げるためには、オブジェクト指向設計をきちんと理解した上で開発することが重要だ。Java による解説書が多い中で Ruby を採用している点も特徴で、Ruby でプログラミングを学ぼうという人にオススメの一冊。

技術評論社 三二八〇円

今月の
おすすめ

自然科学

あなたの体は9割が細菌

微生物の生態系が崩れはじめた
アランナ・コリン著

「あなたの体のうち、ヒトの部分は十パーセントしかない」と言われても実感はないが、ヒトは生まれた日から死ぬ日まで、アフリカゾウ五頭分の重量に匹敵する微生物の「宿主」となっている。

マイクロバイオータと呼ばれる一〇〇兆個の共生微生物はヒトの健康を左右し、バランスが崩れると肥満やアレルギー、自己免疫疾患、心の病気を引き起こすこともある。では、マイクロバイオータのゲノム集合体「マイクロバイオータ」の解析によって、これらの病気を効果的に治療することができなのだろうか。微生物生態系を修復するという試みはまだ新しい分野で先行きは不透明とのことだが、病気の根本原因に迫る研究のさらなる発展を期待したい。

河出書房新社

二〇〇〇円

20世紀の思想から考える、
これからの都市・建築

横浜国立大学大学院／
建築都市スクールY・GSA編

都市・建築における批評の可能性を、二十世紀に活躍した六人の建築思想家を読み解くことで摸索する。このような試みは、「場のちから」を喪失した建築の冬の時代(内藤廣)にこそ必然性を持つ。資本主義しかない世界では、都市・建築においてこそ、それ以外のやり方を思考しておくことが必要で、それは生きていくための基盤である「ローカル」を持つということである。しかし格差社会の広がり、スラム街やゴーストタウンの拡大を見ずとも瞭然であり、都市構想の段階から「場」を組み込むという試みは、成功してはいない。「資本主義しかない世界」に抗し得る「ローカル」とは、松本哉のような「マスケ」による「場」の形成のちから(『世界マスケ反乱の手引書』筑摩書房)と、批判的地域主義(ケネス・フランプトン)やバタン・ランゲージ(クリストファー・アレグザンダー)などの活用による都市形成が合わさった

「場」に生じるのである。

彰国社

二二五〇円

サイボーグ化する動物たち

ペットのクローンから
昆虫のドローンまで
エミリー・アンテス著

ヒツジのドリーが生まれたのは今から十年前の七月。クローン技術や遺伝子工学に対する世間の風当たりは依然強いはまだ。しかし科学は常に進歩する。愛するペットは何度も生き返り、ニワトリは薬の卵を量産し、甲虫はスパイ活動への第一歩を踏み出した。

本書は、現代科学が生み出す「改造動物」の最新線を紹介しつつ、動物の福祉と科学の発展の関係を正面から見つめる。科学技術はただの技術で、善も悪もない。遺伝子操作で盲目のマウスを作るのが人間ならば、絶滅危惧種をクローン技術で救うのも人間である。動物の未来のため、私たち人間は一体何ができるのだろうか。

白揚社

二五〇〇円

今月の
おすすめ

医学書

社会を変える健康のサイエンス

東京大学医学部健康総合科学科編

従来、異なる学問体系は異なる学部で教えられていたが、少子高齢化などの健康課題を抱える日本の未来にとって必要な「総合的な健康」を学ぶ場として、異なる学部同士が連携した教育プログラムが多く始まっている。そうしたなか東京大学医学部の健康総合科学科が作成した入門書が本書だ。大きく三つの分野（環境生命科学、看護学、公衆健康科学）に分けてそれぞれの章ごとに分かり易くまとめられており、健康を軸とした幸福（ウェルビーイング）向上を実現するための「新しい科学」の入り口として最適な書。さあ、扉を開こう。

東京大学出版会

二五〇〇円

ミッシヨンマネジメント

武村雪絵著 『看護管理』『週刊医学界

新聞』（看護号）の連載を統合、大幅に

加筆し書籍化したもの。看護管理を支える鍵は、「ミッシヨン」と「エンパワメント」にあるとする。組織の中の「人」を軸にした、対話によるミッシヨン（人や組織の存在意義と使命）を共有し、一人ひとり力が発揮できるようエンパワメントすることで価値を創り出し、組織が活性化することにより質の高い看護が提供できるようにすることである。患者や働く側双方の幸福（ウェルビーイング）を実現し、誇りや充実感を持って働くことができる職場を作ると語っている。

医学書院

二六〇〇円



見逃してはいけない血算

岡田 定著

ウェブサイト日経メディカルOnline

neに二〇一四年から約二年弱にわたつ

て連載されてきた記事を加筆・修正したもので『誰も教えてくれなかった血算の読み方・考え方』（医学書院）の姉妹本である。日常診療を行う際、血算の指標は治療方針を決めるうえで必要不可欠な項目の一つであり、正確に読み取る必要がある。本書は実際にあった事例を取り上げ、総合的に診断する考え方がまとめられており、研修医やプライマリ・ケア医、検査技師にとって役立つ一冊となっている。巻末にはポケット版カードの「血算データ早見表」付き。

日経B P社

三九〇〇円

老いることの意味を問い直す

フレイルに立ち向かう

新田國夫監修

飯島勝矢・戸原 玄・矢澤正人編著

前著『食べることの意味を問い直す』の続編。超高齢化社会に伴い、要介護認定者数が急増する現代。健康長寿のために、栄養・身体活動・社会参加を三位一体としたフレイル（虚弱）予防を提案。実際に行われた活動を紹介しながらその必要性を解説。

クリエイツかもがわ

二二〇〇円

今月の
おすすめ

社会科学

インドから考える

アマルティア・セン著

著者は一九九八年にノーベル経済学賞を受賞し、ハーバード大学などで教鞭をとった経済学者である。本書は経済学の専門書ではなくエッセイ集であり、『ザ・リトル・マガジン』というインドを中心に発行されている雑誌に掲載されたここ十数年にわたるエッセイと、国会、大学、学術会議などでの講演を収録している。エッセイというものの、テーマはインドの昔からある貧困や不平等などの社会問題をとり上げ、インド各地で使われている曆などの文化についても論じている。

NTT出版 二四〇〇円

死神の報復

レーガンとゴルバチョフの軍拡競争(上下)

デイヴィッド・E・ホフマン著

冷戦時代、米ソ両国は互いに対する不信の中、ヒロシマ型原爆に換算すると約

百万発分の核兵器を持つに至り、それと同時に化学兵器や生物化学兵器の開発も行われていた。

本書ではレーガンとゴルバチョフを中心として、「戦争恐怖症」にとりつかれた時代に軍拡競争下に歯止めをかけようとして「人間」として奮闘した人々を描いている。冷戦時代においては最悪の事態を避けることはできたが、冷戦後の今も負の遺産である兵器はまだまだ存在し、「死神の手」として新たな脅威となっている世界への警告でもある。

白水社

(上)三三二〇円、(下)三五〇〇円

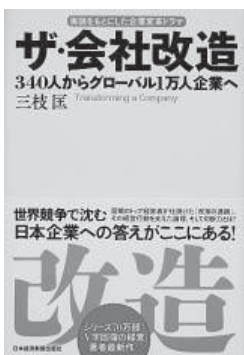
ザ・会社改造

三枝 匡著

「事業再生専門家」のコンサルタントとして活躍し、『V字回復の経営』などの著作で名を馳せる著者による経営書。本書では、その著者が外部取締役から社長CEOに就任し、三四〇人から一万人のグローバル企業にまでに成長させた実話をもとにして書かれている。経営上の重要な場面はドキュメンタリータッチで描き、コンサルタントとしての解説を加

え、コラムを随所に入れていくという書き方である。そこには経営者育成への思いが溢れている。

日本経済新聞出版社 一八〇〇円



ロビイングのバイブル

ベクトルパブリックアフェアーズ事業部

藤井敏彦・岩本 隆著

ビジネスやスポーツにおいて、ルールや基準の変更で日本が不利になったという話をよく耳にする。そこに働いているのはロビイヤーの力だ。負の印象が強いロビイングだが、近年その透明性が高められ、公益を目的としつつ、自らに有利なルールを形成する公正な戦略となっている。五輪招致などの成功例も出てきたが、各国と比べ日本では対策が遅れが目立つ。本書では豊富な事例と共にロビイング

の現状や始め方を平易に解説。グローバル社会で生き残っていくためにはもはや不可欠ともいえるロビイング。まずは正しく知ることから始めたい。

プレジデント社 一五五〇円



「自分の殻」を打ち破る

ハーバードのリーダーシップ講義

ロバート・ステイヴン・カプラン著

一般的に、リーダーシップは天性の資質の問題と考えられている場合が多い。しかし本書では逆に、習得できるもの、スキルや知識を身につけることができる、誰でもリーダーになることができる」と論じている。五つのステップに分けて必要なものが解説されているが、経営者マインドの重要性や人間関係の構築方法など、いずれも非常に説得力のある内容

だ。体験に基づく事例は読んでわかりやすく、実用的な面を強く感じさせる一冊。

CCCメディアハウス 一五〇〇円

ディズニーを目標した男 大川博

津堅信之著

大川博は東映初代社長であり、日本初のカラー長編アニメを作ったにもかかわらず、日本アニメ史及び日本映画史からは忘れられつつある人物である。大川に関してこれまであまり研究されておらず、「映画を知らない男」「ワンマン経営者」とマイナス評価が多く残る。

経理マンとして東映再建を果たし、東映アニメーションという場を作った業績のある人物が、何故評価されないのか。疑問を抱いた著者が、学術用語の多用を避け、非常に読みやすく記した評伝。

日本評論社 二二〇〇円

「鬼畜」の家

石井光太著

副題は「わが子を殺す親たち」。近年、虐待や育児放棄で子どもを死なせてしまう事件が増えている。加害者である若い親たちとその周辺を取材した本

書を読むと、切ない思いに駆られてしまう。彼らの生い立ちもまた、貧しさや複雑な家庭環境のもとで育っていて、親の愛情や家族団欒の幸せを知らずに大きくなったケースが多いからだ。行政や地域コミュニティ等、様々な面で支援しあい、このような出来事を少しでも減らす努力が必要だ。

新潮社 一五〇〇円

神山プロジェクトという可能性

NPO法人グリーンバレー・信時正人著

神山町は徳島県の山間部に位置する。かつては人口が二万人を超えていたが過疎化が進み三分の一に減少。しかし様々な取り組みをおこない、地域の活性化に成功した。アートによる町おこしや、企業誘致等、いくつもの事業が実を結んで、いま全国的にも注目度の高い町となっている。

本書にはプロジェクトに関わる二十数名が登場し、それぞれの本音を語り合う対談集となっている。お役所主導ではない、住民たちの内発的エネルギーを凄く感じる町だ。

廣済堂出版 二〇〇〇円

今月の
おすすめ

人文科学

サピエンス全史 上・下

ユヴァル・ノア・ハラリ著 柴田裕之訳
 新進気鋭の歴史学者による本作は、二〇一一年に出るや世界中でベストセラーとなり、『銃・病原菌・鉄』のジャレド・ダイアモンドや、ビル・ゲイツなども推薦している。筆致は読みやすく、視点がブれないのでつかみやすく、一気に読み通すことができる。地球上に現れた最も革新的な種「ホモ・サピエンス」はいかにして文明を築き上げたのか。科学革命は我々をどこへ連れていくのだろうか。

河出書房新社 上下巻各一九〇〇円



物質と意識

脳科学・人工知能と心の哲学

ポール・チャーチランド著

何度も版を重ねてきた、心の哲学の代表的な入門書。心身問題を中心に据え、この問題に対する諸立場を明快に解説、その長所・短所までを論じる。話題の人工知能を含め、心の科学の成果を詳しく紹介している点の特徴。ちなみに、著者の妻は同じく心の哲学研究で著名なパトリシア・スミス・チャーチランドである。

森北出版 二八〇〇円

宗教現象学入門

人間学への視線から

花園聰麿著

ミュラー、オットー、レーウ、エリアーデ、メンシング——彼らは宗教を通じて「人間（として生きること）」の特徴や意義を明らかにしようとする問題意識を共有していた。

本書は彼らの宗教現象学（ないし比較宗教学）の研究業績に即して、宗教の「人間学的理解」の内容を浮き彫りにすることを試みる。

平凡社 三四〇〇円

人生を劇的に変えるほんの少しの習慣

ビル・オハンロン著

著名なセラピストのビル・オハンロン。

日本では専門性の高い著作が翻訳されるに留まっていたが、この度一般向けの、「人生を変えるための52のリスト」が出版された。一年五十二週間で一つずつ実行できるように作られている。このリストを実行したからといって、よりよい人生が手に入る保証はないと本書にはある。しかし実行すれば確実に何かが変わる、そんな希望を抱かせてくれる一冊。

宝島社 一二〇〇円

公教育をイチから考えよう

リヒテルズ直子・苫野一徳著

世界の教育事情、特にオランダの先進的な教育に詳しい教育研究者と、新進気鋭の教育哲学者が、社会の変化に伴いその役割が改めて問われる公教育のあり方について分析し、他国の教育も参照して考察する。混乱を招くだけの様々な教育観の対立を克服するには、できるだけ共通理解が可能な、公教育の本質を理解し、たうえでの議論の必要性を説く。

日本評論社 一七〇〇円

今月の
おすすめ

文学・文芸

罪の声

塩田武士著

昭和最大の未解決事件『グリコ・森永事件』を題材にした本作品。

犯行に使われたテープの子どもの声は自分の幼いころの声だった……という画期的な視点が生み出すリアリティは、どこまでが真実でどこからが創作なのか、その境界をわからなくさせる。

『グリ森』をテーマに書くという著者の執念、事件に巻き込まれた子どもへの想いがひしひしと感じられ、中盤以降ページをめくる手が止まらなくなる。

これまでも綿密な取材を重ね、様々なテーマに挑んできた塩田武士さん。

その一つの到達点ともいえる『罪の声』は、間違ひなく今年の傑作になると確信している。今読んでおかないと、絶対に損する一冊だ。

講談社

一六五〇円



シンマイ！

浜口倫太郎著

気に喰わない上司を背負い投げして戦となった翔太が、新渇の気難しい祖父・喜一から米作りを教わることになる。

毎朝五時に田んぼをじっと注視するだけでも教えてくれようとしなない祖父にやきもきするが、あるきっかけで喜一の米を味わい、感動して米作りに目覚める。

勝気な新米農家の里見や、気障な兼業農家の光太郎とともに米作りに励む翔太。

小さな出来事が稲に大打撃を与えるが、喜一の長年の勘と経験が稲を最高の米に導いていく。魅力的な登場人物が物語を盛り上げ、米への愛情が深まり、米が主食の日本人で良かった！と強く感じる作品だ。喜一と翔太、その家族の絆

に胸が熱くなるだろう。

小学館

一五〇〇円

落陽

朝井まかて著

好奇心を刺激され、気概ある人々の生きざまに胸あつく。朝井まかて『落陽』は明治神宮造営をめぐる物語であり、明治を生きた人々、そして明治天皇の物語だ。

明治天皇崩御後つくられた明治神宮。

九十年前、そこは荒地だった。鎮守の杜の完成までは一五〇年。それほど年月をかけ造り上げるのだと、未来を見えて明治神宮造営にかかわった人々の熱意、エネルギーにはただただ圧倒されてしまう。いまだ途上の姿だという鎮守の杜への興味も尽きない。

けれどなによりも惹きつけられるのは、明治天皇その人だ。作中で語られる明治天皇にまつわるエピソードはどれも印象的で、明治天皇ご本人はどういった方だったのだろうかという物語にひきこまれてしまう。

一気読み必至の作品。

祥伝社

一六〇〇円

今月の
おすすめ

文庫・新書

おみおんな
臣女

吉村萬香著

男は浮気した。小柄だった妻とは違う、大柄な女に夢中になったのだ。それを知った妻の身体は、その日から巨大化していった。大量の水を飲み、凍ったままの肉をかじり、大量の排泄をくりかえし、時折、悲しみと憎しみを爆発させて暴れまわる。骨が隆起し、体に変化していく痛みに苦しみ、言葉すら発することができなくなる妻。だんだんと、昔の面影が消えていく、妻。当初勝手に抱いていた「恋愛小説」のイメージとはずいぶんかけ離れていて、恋や愛のきらめいた上澄みのような部分はその昔に泥まみれの地べたに投げ捨てられていた。

妻の身体を巨大化させた感情とはなんだろうか。自分ではない女へ愛情を向け夫への、形容しがたき絶望だけだっただろうか。それだけではない、と思わせようようなラストだった。

愛とはなにか。夫婦とはなにか。その答えは出ないけれど、醜く、臭い、けれどそれだけではない何かに、ただただ、胸がいつばいになった。

徳間文庫

六五〇円

魔術師のおい ナルニア国物語1

C.S.ルイス著 土屋京子訳

ファンタジーの傑作『ナルニア国物語』の新訳刊行が開始された。現在発行されている岩波書店版は原著の刊行順に並べられているが、この新訳版は物語の時系列に沿って刊行されるので、一巻目はナルニア国が誕生する「魔術師のおい」となるのである。著者自身がこの順で七巻の作品が読まれることを希望し、欧米での出版はこの時系列順の刊行が標準となっていることから、この形が採用された。

訳文は、もともと児童文学である本作を、幅広く大人も楽しんで読みやすい文庫になった。振り仮名は小学校四年生以降の漢字にふられている。読んでこのある人には新しい発見、初めて読む人には主人公の冒険にわくわくしながらページをめくることになるだろう。

二巻「ライオンと魔女と衣装だんす」

は二〇一六年十二月、以下全七巻を順次刊行予定。

光文社古典新訳文庫

六八〇円

同時通訳はやめられない

袖川裕美著

海外からのニュースの継などでおなじみの同時通訳。外国の言葉聞いて一瞬のうちに日本語に変換するプロフェッショナルの脳はどうなっているのだろうか？と思ったことは少なからずあるのではないだろうか。

放送や会議など現場の第一線で活躍してきた著者の体験談は、もし自分がその場にいたら……と想像して、読んでいただけで変な汗が出て来る。それほど通訳というのは責任の重い仕事だ。この本を読んでから同時通訳の放送などを聞くと、今までは一味違って聞こえるだろう。

また、国際社会の最前線に立つ同時通訳者には、日本はどのように見えているのか。第二章は、外国の要人や著名人の通訳を務めた経験や、世界で活躍する日本人の使う英語を通じて、これから我々がどのように言語と付き合うか、を考えするための参考になる。

平凡社新書

七八〇円

今月の
おすすめ

芸
術

ボリス絵日記

ヒグチユウコ著 大人気イラストレーターであるヒグチユウコさんが、ツイッターで不定期連載をしているマンガ「ヒグチユウコ絵日記」をまとめた一冊。ヒグチユウコさんの愛猫ボリスをはじめ、ぼっちゃん、ニャンコ、コトリなど、個性豊かなキャラクターたちが繰り広げるユーモラスな世界。シニールで、ちよつとだけブラック。けれども時々ハートフルなお話には、読んでいて全く飽きが来ない。

ツイッターに連載されたものに大幅な修正を加えているので、今までツイッターで読んでいた方にとっても、新鮮な気持ちで楽しめる内容となっている。

今までヒグチユウコさんのイラストしか見たことのなかった方にとっては、あの意味衝撃的な一冊となっているかもしれない。独特の世界観あふれるボリスの

芸
術

「日常」を覗き見てはいかがだろうか。

今夏は本書を含め四社から四点（限定

版を含めると五点）ヒグチユウコさんの作品集が刊行されたので、併せてどうぞ。

祥伝社 一二〇〇円

*『すきになつたら』（プロンズ新社・一四〇〇円）

*『ギュースターヴくん』（白泉社・一四〇〇円、手帳つき限定版二七〇〇円）

*『ヒグチユウコ 100 POSTCARDS』（グラフィック社・三五〇〇円）



芹沢銈介・装幀の仕事

小林真理編著

素敵な装幀の書籍を見かけて、つい「ジャケ買い」をしてしまった経験がある方も多いのではないだろうか。本書は、二十世紀日本を代表する染色工芸家であり画家でもあった芹沢銈介さんが手がけた、装幀家としての仕事を紹介している。

染色の技法である「型絵染」という手法を用いて創作した、彩鮮やかで、味わい深い作品の数々。五十年以上前に制作されたモダンなデザインは、もはや素敵としか言いようがない。

雑誌「工藝」をはじめ、数々の文藝作品を手掛けた芹沢銈介さんの仕事を知ることのできる一冊となっている。

里文出版 二八〇〇円

親子で学ぶ音楽図鑑

キヤロル・ヴォーダマンほか著

大人気シリーズ、創元社の「親子で学ぶ図鑑」数学、科学、英語に続いて音楽が今夏発売された。取り上げられているテーマは音楽の歴史から音階、対位法、楽器など多岐にわたる。

子どもにとっては難しいのでは？と思われるテーマを扱っているが、カラフルな図版を多用し、目で見て楽しめる図鑑にしたことで最後まで飽きさせることなく学習することができる。

もちろん大人の方が読んでも十分読み応えがあるので、一家に一冊あると、あらゆる世代で楽しむことが可能だ。

創元社 二八〇〇円

**今月の
おすすめ**
実用書
地図・旅行書

電動アシスト自転車を使いつくす本

疋田 智著 子どもが生まれたから、体力が落ちてきたから、引越し先が坂の多い街だったから……普通の自転車から電動アシストつきに乗り換える理由はさまざまだが、買ったからにはなるべく長く乗りたいもの。しかも一台十万円は下らないとなれば、その思いは切実だ。

本書にはそんなあなたの期待に応える情報が盛りだくさん。高価なバッテリーを長持ちさせる充電方法から、楽に、そして安全に走行するためには、サドルほどの程度の高さにすべきかまで。ちなみに自転車のバッテリーは携帯電話と違い、残量ゼロになったあとでも即切れるわけではないそう。実際にやってみた(〜)著者の体感では、上り坂なら一キ口弱、平地ならなんと七、八キロはアシスト力が続くとか。

また、巻末のアシスト自転車のありう

るべき未来も興味深い。前輪二輪、後輪一輪、雨風避けつきの電動アシスト自転車、車に代わる地方都市の老後の足として売り出したらどうかというもの。車より手軽で健康にもよく、そして何よりスタイリッシュな？と思われた方、ぜひ本書一九三ページをご覧ください。

車より経済的で、でも行動範囲をぐんと広げてくれる新しい自転車のかたち。もう乗っている方はもちろん、買おうか迷っている方にも、あんなの邪道だよ、と思っっている方にもお勧めしたい一冊。

東京書籍 一五〇〇円



The Journey

自分の生き方をつくる原体験の旅

四角大輔・TABIPPO編

あなたが今まで生きてきた人生の中で、心を強く揺さぶられた衝撃的な体験といえばなんだろうか。著者はそういった体験を「原体験」と称し、原体験こそがこれからの社会を自分らしく生きていくための手掛かりになるとして、自ら原体験にもとづいたライフスタイルを実現している。

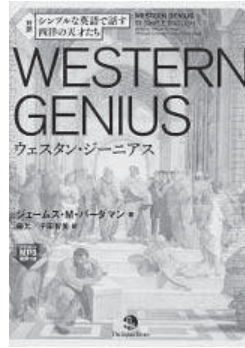
現在、私たちが生きる社会はネットやテレビなどの情報にまみれ、人々はそういった刺激にいちいち反応することを忘れてしまった。結果的に自分らしさが分からなくなったり、生きる目的を見失ってしまったたりしている人もいるだろう。本書はただ日々を過ごしているだけでは出会えない、忘れられない「自分だけの原体験」を見つげるために旅に出た十人の多様なエピソードを収録しており、その中には旅での出会いを通して初めて同性愛者としての自分を受け入れられたという人もいる。

こんな風に生きていくことも可能なのだという新たな気付きで今までの価値観から解放され、人生を変えるきっかけもなりうる一冊。

いるは出版 一五〇〇円

今月の
おすすめ

語学・辞典



対訳シンプルな英語で話す

西洋の天才たち

ウェスタン・ジーニアス

ジエームス・M・バーダマン著

本書は人気シリーズの第三弾。西洋史上九十九人の天才たちの功績を英日対訳形式で読んでいく。

本文は英語ネイティブに伝わりやすいシンプルな英語で書かれている。難しい語句や歴史的な事柄には補足説明があり、辞書を引かなくても読み進められる。また、一人一ページ見開きなので、興味のある偉人から読み始めることもでき

る。音声もダウンロードできるので、ネイティブのシンプルな言い回しを耳からも覚えられる。

バーダマン先生の英語で歴史を学ぶシリーズには「日本史」と「アメリカ史」もあるので、興味がある方はそちらも手に取ってみて欲しい。

ジャパンタイムズ 一八〇〇円

英文翻訳術

東大名譽教授と

名作・モームの『大佐の奥方』を訳す

行方昭夫著

前著『英文精読術』に引き続き、サマセット・モームの作品を題材にして、英文読解・翻訳に焦点を当てる。

英文を読み、翻訳に至る道のりを語釈↓試訳↓翻訳とすると、今回は試訳をどうすれば読みやすい翻訳に仕上げられるかを解説している。具体的には、『大佐の奥方』の原文に対して試訳と翻訳が並べられており、比較することができる。

また、なぜその翻訳に至ったかについて、ページ下の部分で著者の解説がされている。後半では翻訳する上でのテクニクや知っておきたい暗記用例文集が掲載さ

れており、翻訳に興味のある方、もちろん精読やモームなどの作品そのものが好きだという方にもお勧めだ。

DHC 二〇〇〇円

「読む・聞く・話す・書く」が劇的に伸びる！
英語の授業

肘井 学著 英語を英語のまま理解できるようになることは多くの学習者の目標だが、初中級の段階では、日本語を介して英語の意味を理解するプロセスが大切だ。このような勉強を積み上げて英語上級者に近づいていく。

英語を日本語として自然な訳にしようとすると、語順の違いのため英語を返り読みしなければならなくなる。ここでは返り読みできない「聞く」「話す」「書く」の能力が上がりづらい。本書はこういった問題に陥りがちな接続詞や関係詞に、新たな解釈をすることで、返り読みせずに英語を理解することを目指した本だ。付属CDを使い例文を音読して使いこなせるようになれば、英語の四技能を伸ばすことができるだろう。英語を「読む」以外が苦手な方にお勧めだ。

祥伝社 一八〇〇円

今月の
おすすめ

児童書

天女銭湯

ペク・ヒナ作 長谷川義史訳

表紙にかなりインパクトの強い人形のおばあちゃんの顔。ヤクルトらしきものを飲んでいきます。この絵本作家は、自称人形いたずら作家と言うらしい。

女の子が、お母さんと古い銭湯に行く
と、浴槽の中から天女のばあちゃんが現
れました。そのばあちゃんは羽衣を失く
して、銭湯の水風呂にいるしかないらし
いのです。ばあちゃんは水遊びのプロ。
楽しいひと時を過ごします。

ブロンズ新社

一四〇〇円



くじらのくじらん

市川宣子作

村田エミコ絵

ある日海の底にバナナが落ちていまし
た。バナナを見たことがないくじらんな
ちは、お月さまが落ちていいると思い、こ
れは大変だとお日さまへ知らせるため、
力を合わせます。その晩、夜空の三日月
を見て無事に戻つてよかつたと喜ぶくじ
らんなち。海の仲間たちの温かく可愛ら
しいお話が八話収録された幼年童話です。

リーブル

一三〇〇円

おつきみ

あまんきみこ作

黒井 健絵

お月見の準備をしていたえっちゃん。
気づくとお空はどんより雲です。
「でかぐもさあん。のいてよう。のい
てくださあい。」そこで子ねこのミュウ

は、おもちゃ箱にえっちゃんを乗せ、で
かぐもさんをお願いするためお空へ飛び
出しました。秋桜のお花畑や画面いつぱ
いの夕焼けが、より一層秋の気配を漂わ
せ、四季の美しさも感じられる温かなお
話の絵本です。

ひさかたチャイルド

一三〇〇円

ダーウィンと旅して

ジャクリン・ケリー作

斎藤倫子訳

前作『ダーウィンと出会った夏』で、
自然科学の面白さに目覚めた少女キャ
ルバーニア。祖父の手ほどきを受け、日々
の観察を続けていたキャルバーニアは、
ある朝庭で見慣れない鳥を目にします。
海岸線から遠く、内陸まで飛んできた鳥
の奇妙な行動はやがて起こる大規模な自
然災害の前兆でした。一九〇〇年のアメ
リカ、時代に翻弄されながらも自分らし
く生きようとする少女の物語です。

ほるぷ出版

一五〇〇円

お月さまのこよみ絵本

千葉 望文

阿部伸二絵

昔、日本はお月さま中心の旧暦でした
が、今は、新暦といってお日さま中心の
こよみです。年中行事はお月さまとは
切っても切れない関係でした。旧暦で
行事の意味を解いています。

理論社

一四〇〇円

「目に見えないコレクション」

石黒 峻登

本作では、ドイツのある家庭にスポットがあてられ、第一次大戦後の破局的なインフレがその時代背景になっている。

絵画コレクターである盲目の夫を世話する妻と娘は、露命をつないでいくために、絵画を売るといふ苦渋の選択を強いられる。コレクションが何よりのいきがいである盲目の夫には、絵を売ったことはもちろん、家庭の経済的な窮状や、それを引き起こした世情を伝えないことで、夫の幸福がなんとか保たれている。

そして、そこに訪れた古美術商も、その家族の事情を理解し、吹いたら消えてしまいうような、そのはかない幸福の火を消さないために、一肌脱ぐことになる。

本作の優れている点は、盲目の絵画コレクターという異色な人間を登場させたことにあると思う。不可避で残酷な時代に侵されるコレクターの危うい幸福と、それを保つための家族と古美術商が利かせる機転とが見

事に描写され、いたく胸を打たれた。

私たちが学校で学ぶ歴史は、政治史、文化史、外交史など、人間社会の変遷を巨視的にとらえたもので、ある特定の人物や家庭にスポットがあてられることはほとんどない。

ややもすると、歴史を学んで、その時代のことを知ったつもりになってしまう。だが、逆らえない時代の趨勢の中に、無数の人間ドラマがあつたのだということをおの作品で、改めて思い知らされた。

そして、いつの時代でも、人を感動させるのは、人と人との心のふれあいなのだろうと考えるに至った。

(二十五歳・アルバイト)

*『チエスの話 ツヴァイク短編選』(みすず書房・シユ
テファン・ツヴァイク著・二八〇〇円)

『人生計画の立て方』

大澤 尚

明治十七年東京山林学校に入学したが、一度は落第するものの勉強し主席で卒業、その後林学を学ぶためドイツへ私費留学、ミュンヘン大学で国際経済学博士号を取得、明治二十五年東京農科大学助教となる。「月給四分の一天引き貯金と一日一頁の原稿執筆」を開始し、研究生活のかたわら植林、造園、産業振興など多方面で活躍、日比谷公園を皮切りに、北海道の大沼公園や福島県の鶴ヶ城公園、埼玉県の羊山公園、東京都の明治神宮、長野県の臥竜公園、石川県の卯辰山公園、福岡県の大濠公園ほか、設計・改良に携わった。昭和二年に定年退官したのを期に、全財産を匿名で寄付し、昭和二十七年一月に八十五歳で亡くなった「林業の父」と異名をとった本多静六の著作である。

本多静六は人生には「計画が必要」であると説く。日常生活でも計画の有る無しでは全く違うものになると指摘している。だから、二度と繰り返せない人生には計画が必要だと強調するのだ。そして、計画に向かって努力することが重要としている。だから、計画だけ立てても無意味なのだ。そして、本多静六は人生計画

の第一に「勤儉貯蓄」を挙げている。それは「経済的な基礎」が最も大事だからと説く。

それは幼少時代貧しくて苦労を重ねた経験から導き出された人生訓である。そして、四十歳から六十歳までは専門の職務を通して、「国家社会のために働き抜く」こと、その後六十歳からの十年間は「一切の名利を超越し、勤行布施のお礼奉行」をする。さらにその後七十歳以上になったら「居所を山紫水明の温泉郷で晴耕雨読の晩年を過ごす」ことを目標にし、それを実践してきたのである。質素節約をし、自身を律することはなかなか難しいことであるが、これを実践することは非常に重要である。

本書は、「林業の父」と言われた偉大な研究者にして投資家でもあった本多静六の人生を語った二冊である。

(五十一歳・一般社団法人研究員)

*『人生計画の立て方』(実業之日本社文庫・本多静六著
四七六円)

『子鹿物語』

岩井 美紀江

舞台は南北戦争後のアメリカ。フロリダ北部の森林地帯で暮らす一家を主人公に、十一歳の一人息子ジョーデーが子鹿とのふれ合いを体験して、成長していく物語です。

父親が仕留めた鹿の横に生き残っていた子鹿を、ジョーデーは家で飼おうとしますが、母親と一緒に寝食を共にするのを嫌います。そのため、悲劇は起こります。私が暮らす二十一世紀の日本とは全く違う世界が描かれていることに、驚きました。過酷な自然との闘い。自ら育てた作物や家畜が無くなれば、一家が飢え死にしてみよう厳しさ。自然界に住む動物は、時には自分達の命や生活を脅かす害獣になります。

そのための銃所持と父親を中心とした家族の結束を重視するアメリカ開拓時代の精神が、少し理解できませんでした。アメリカが銃規制が進まなかったり、正当防衛を日本以上に広く解釈する歴史的背景を見た思いです。

ジョーデーが可愛がっていた子鹿は、父親が育てた作物を食い荒らし始めます。父は我が子に、子鹿を山の中に連れて行って自らの手で殺せと命じますが、ジョー

デーはできませんでした。それを知った母親が、子鹿を銃で撃ち、父親がジョーデーにとどめを刺すように言います。

ジョーデーはショックで一時期家を出ますが、やがて戻ってきます。たとえ可愛い子鹿といえども共存できないことを理解したジョーデーは、父のように強たく、くましいアメリカの男に成長してゆくのでしょうか。

動物をペットとして飼った経験しかない私も、読んでいてショックを受けましたが、人間の命か、子鹿の命か、この時代を選択を迫られれば、子鹿を殺す方を選ぶと思います。その選択をしなくていい時代、場所に生きていることに、少しホッとしました。

(五十九歳・自営業)

*『子鹿物語(上)(中)(下)』(偕成社文庫・ローリン
グズ著・各七〇〇円)

ATION

<p>ジュンク堂書店 ＝名古屋栄店＝ ☎(052)212-5360 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 ＝名古屋セントラルパーク店＝ ☎(052)971-1231 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝口ト名古屋店＝ ☎(052)249-5592 [営業時間] 10時半～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝名古屋店＝ ☎(052)589-6321 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝岐阜店＝ ☎(058)297-7008 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝四日市店＝ ☎(059)359-2340 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝滋賀草津店＝ ☎(077)569-5553 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 ＝京都本店＝ ☎(075)253-1599 [営業時間] 11時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝京都店＝ ☎(075)252-0101 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝高槻店＝ ☎(072)686-5300 [営業時間] 10時～22時</p>	<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝梅田店＝ ☎(06)6292-7383 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 ＝関西国際空港店＝ ☎(072)456-6486 [営業時間] 7時～21時半</p> <p>丸善 ＝八尾アリオ店＝ ☎(072)990-0291 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝高島屋大阪店＝ ☎(06)6630-6465 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝大阪本店＝ ☎(06)4799-1090 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝難波店＝ ☎(06)4396-4771 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝天満橋店＝ ☎(06)6920-3730 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝上本町店＝ ☎(06)6771-1005 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝梅田ヒルトンプラザ店＝ ☎(06)6343-8444 [営業時間] 11時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝近鉄あべのハルカス店＝ ☎(06)6626-2151 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝奈良店＝ ☎(0742)36-0801 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝西宮店＝ ☎(0798)68-6300 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝芦屋店＝ ☎(0797)31-7440 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝神戸住吉店＝ ☎(078)854-5551 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝三宮駅前店＝ ☎(078)252-0777 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝三宮店＝ ☎(078)392-1001 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝神戸さんちか店＝ ☎(078)335-2877 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝舞子店＝ ☎(078)787-1250 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝姫路店＝ ☎(079)221-8280 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝岡山シンフォニービル店＝ ☎(086)233-4640 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>丸善 ＝広島店＝ ☎(082)504-6210 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝広島駅前店＝ ☎(082)568-3000 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝高松店＝ ☎(087)832-0170 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝松山店＝ ☎(089)915-0075 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝博多店＝ ☎(092)413-5401 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝福岡店＝ ☎(092)738-3322 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝大分店＝ ☎(097)536-8181 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 ＝天文館店＝ ☎(099)239-1221 [営業時間] 10時～20時半</p> <p>ジュンク堂書店 ＝鹿児島店＝ ☎(099)216-8838 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝那覇店＝ ☎(098)860-7175 [営業時間] 10時～22時</p>
---	---	--	---

INFORM

<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 札幌店 ＝ ☎(011)223-1911 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 旭川店 ＝ ☎(0166)26-1120 [営業時間] 10時～19時半</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 弘前中三店 ＝ ☎(0172)34-3131 [営業時間] 午前10時～午後7時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 盛岡店 ＝ ☎(019)601-6161 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 仙台アエル店 ＝ ☎(022)264-0151 [営業時間] 10時～21時 日・祝10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 仙台TR店 ＝ ☎(022)265-5656 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 秋田店 ＝ ☎(018)884-1370 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 郡山店 ＝ ☎(024)927-0440 [営業時間] 10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 水戸京成店 ＝ ☎(029)302-5071 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 丸広百貨店飯能店 ＝ ☎(042)973-1111 [営業時間] 10時～19時</p> <p>8月31日 OPEN !</p> <p>丸善 ＝ 丸広百貨店東松山店 ＝ ☎(0493)23-1111 [営業時間] 10時～19時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 大宮高島屋店 ＝ ☎(048)640-3111 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 桶川店 ＝ ☎(048)789-0011 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 津田沼店 ＝ ☎(047)470-8311 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 舞浜イクスピアリ店 ＝ ☎(047)305-5808 [営業時間] 11時～21時、土・日・祝10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 松戸伊勢丹店 ＝ ☎(047)308-5111 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 南船橋店 ＝ ☎(047)401-0330 [営業時間] 10時～21時</p> <p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 渋谷店 ＝ ☎(03)5456-2111 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 丸の内本店 ＝ ☎(03)5288-8881 [営業時間] 9時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 日本橋店 ＝ ☎(03)6214-2001 [営業時間] 9時半～20時半</p> <p>丸善 ＝ お茶の水店 ＝ ☎(03)3295-5581 [営業時間] 月～金10時～20時半 土10時～20時 日・祝10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 多摩センター店 ＝ ☎(042)355-3220 [営業時間] 10時半～21時</p> <p>丸善 ＝ 有明ワンザ店 ＝ ☎(03)5530-5701 [営業時間] 10時～19時半</p> <p>丸善 ＝ メトロ・エム後楽園店 ＝ ☎(03)5684-5130 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 新宿京王店 ＝ ☎(03)5321-8327 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 池袋本店 ＝ ☎(03)5956-6111 [営業時間] 月～土10時～23時 日・祝10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ プレスセンター店 ＝ ☎(03)3502-2600 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 大泉学園店 ＝ ☎(03)5947-3955 [営業時間] 10時～22時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 吉祥寺店 ＝ ☎(0422)28-5333 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 立川高島屋店 ＝ ☎(042)512-9910 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ ラゾーナ川崎店 ＝ ☎(044)520-1869 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 ＝ 横浜ポルタ店 ＝ ☎(045)453-6811 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 藤沢店 ＝ ☎(0466)52-1211 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 新潟店 ＝ ☎(025)374-4411 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 岡島甲府店 ＝ ☎(055)231-0606 [営業時間] 10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 松本店 ＝ ☎(0263)31-8171 [営業時間] 10時～20時</p> <p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 新静岡店 ＝ ☎(054)275-2777 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 名古屋本店 ＝ ☎(052)238-0320 [営業時間] 10時～21時</p>
---	---	---	---

営業時間は変更する場合がございます。ご了承ください。

定休日については、お手数をおかけしますが弊社HPまたは直接各店までお問い合わせ下さい。

ブックブレスター



投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えてください。四〇〇字×六〇〇字程度で、おすすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。掲載分には二千元の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承ください。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―151-5

丸善ジュンク堂書店「書標」編集室係
TEL〇三―15956―6111

いつも「書標」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌定期購読料は以下の通りです。

定期購読料 年間二二三〇円（送料込）
現金書留もしくは八十二円切手十五枚で

お申し込み先

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―151-5

丸善ジュンク堂書店特急係
TEL〇三―15956―6111
FAX〇三―15956―6100

編集後記

東京不忍ブックストリートの一箱古本市、名古屋のブックマークナゴヤ、福岡のブックオカなど、全国に広がる本のイベント。今月の「著書を語る」はブックオカの十周年記念車座トークについて。本と本屋の未来を、熱く語っている。

(緒)



PC・スマートフォンから
<http://www.junkudo.co.jp/>

QRコード



書店と映画館

入口正面のエスカレーターから続々と降りてこられるお客様、いらっしやいませとご挨拶も追いつかないほどの大勢の方が私の目の前を通り過ぎ店内へと入っていかれる……。

というのは理想ではありませんが、いつもそのように混み合っていないのが現実です。しかしこの夏、当店では八月の下旬からそんな理想の状況が休日ごとに繰り返されているのです！

私が勤めている新静岡店は丸善ジュンク堂書店の中でも数少ない、同じ商業施設内に映画館がある店舗です。上層階にある映画館での上映が終わると、当店

の目の前を通るエスカレーターを利用される方が多く、レジに入っていると人の流れで上映のサイクルがよくわかります。

普段は特別気にはならないのですが、やはりこの夏の大ヒット映画『君の名は。』／まさしく話に違わぬ盛況ぶりです。バーゲンの日でもこれだけの人は通らないよなど、違った視点から映画のヒットを感じている私です。

さて、私たちも仕事をしっかり行わねばなりません。入口正面に展開している『君の名は。』関連書籍はちょうど降りてこられた方々の目に止まり、手に取られたお客様であつという間にレジが混み合います。このひとつのサイクルが終わると、減った商品を補充してまた次の上映終わりに備える。と、こちらもこのお祭りに乗り遅れるわけにはいきません。

今回のようなはなかなかきませんが、映画原作の書籍は同様に、映画を観終わった方がお求めにいらっしやいます。この原稿を書いている時点の上映スケジュールを見ても、文庫作品九作、コミック作品四作がその映画館で上映されておおり、あらためて考えても原作本を手にとっていただけに、とても恵まれた立地であるのは間違いないといえます。

このように多大な恩恵を受けておりますが、個人でできるささやかな恩返しとして、私も映画を観に足を運ぶ機会が増えました。休憩時間に席を取り、就業後に映画を観る。丸一日を館の中から外に出ることなく過ごす日々がすっかり定着してしまいました。

あとはアルコールの販売が無いのだけが残念ではありますが(笑)

(土)

「書標 ほんのしるべ」 第45号

二〇一六年十月五日発行 頒価五十円(本体四十六円)

編集・発行人 工藤 恭孝

発行所 (株)丸善ジュンク堂書店

〒160-0008

東京都新宿区三栄町二十九 ニューフィールドビルディング

印刷所 (株)七 旺 社

〒653-0013

神戸市長田区一番町二丁目一

「書標ほんのしるべ」昭和61年7月15日第三種郵便物認可
2016年10月5日発行（毎月1回5日発行 通巻第455号）



日本全国で
3,000万冊の品揃え!
丸善ジュンク堂書店

頒価 五十円（本体 四十六円）

ジュンク堂書店

淳久堂書店

M MARUZEN